

ねがいのいえニュース 第60号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2021年7月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



大変な1年が過ぎ2年目の苦難に突入してしまったこの世界、不安の尽きない毎日ですが、みなさまご無事でしょうか？感染の脅威はまだ収束は遠く、経済的にも精神的にも瀕死の危機に直面する世界に、自然災害が容赦なく襲いかかる地域があり、内戦と空爆を続ける国があり、火山の噴火で多くの子どもたちが炎に焼かれる国もあり、この大変な時になぜこんなことが続くのだろうと悲しみが尽きぬ日々です。身近な人も直接会うことのない遠い国の人々も、全ての人が苦しまずに幸せに生きられる世界がやって来ることを、願ってやみません。

医療的ケア時代の到来

3年に一度の改正を重ねるたびに洗練されていった障害福祉の制度ですが、今年の改正の目玉は医療的ケアの方への支援に対する評価と報酬の見直しでした。ねがいのいえでは18年前のオープン当初から当たり前におこなっていた医療的ケアですが、一般的にはそれはとても難しいことと思われ、そのケアを必要としている人にとっては苦難の年月が続きました。

同じニーズを持つ人が少ない時には当事者だけが人知れず苦しみを強いられ、制度ができて守ってもらえるのはずっと遠い夢のように思えますが、社会に同じニーズの人が増えてきた時に、実態が周知され制度化への機運が高まる、福祉の制度はそうして進んできました。医療的ケアの問題も、今や小児医療の分野で世界一の技術を誇る日本で、命は助かったが重症障害を負った子どもたちの急増で、その機運が高まってきました。重症児を受け入れる事業所がコンビニのようにあちこちにてきて欲しいと小児医療研究会で語ってから10年経たないうちに、重症児のデイサービスが全国にこれほど広がるとは予想していませんでした。

その立役者となった名古屋の鈴木由夫氏は、障害福祉とは縁のない分野から突如この業界に現れ、凝縮された10年を駆け抜けた「花神」のような方でした。鈴木氏が短期間で成し遂げた功績は凡人が何十年かかっても届かないかもしれないと思えます。感謝とともにご冥福をお祈りします。

先日は埼玉医大主催の小児在宅医療支援研究会があり、全国から300名の方がリモートで参加されていました。その研究会ではねがいのいえの実践も発表もさせていただきましたが、翌日、遠方の方からお電話があり、「大変感銘を受け、自分の事業所でも、医ケア児のデイサービスやショートステイ、グループホームにも取り組んでみたいと思いました」と言われました。今、障害福祉で起業したいという人

が増えていますが、中軽度障害を対象にした放課後デイへの参入が多いのが実情です。しかし福祉は「自分がやりたいこと」ではなく「困っている人が必要としていること」をやらなければなりません。全ての事業者が、「24時間切れ目のない支援」から「出会った人の生涯に寄り添う支援」へ進んでいただきたいと願っています。

「生まれ育った町で」から「どこでも好きな町で」

2003年にスタートしたねがいのいえはこの夏19年目に入ります。現在、次のグループホーム建設の国庫補助金を申請中で、審査が通れば同時に社会福祉法人を設立する計画です。気鋭の若手起業家たちが5年ほどで社会福祉法人設立を成し遂げるのが珍しくない昨今、利用されるみなさまの成長に添いながらゆっくりとどこまで来たのも、ねがいのいえらしい歩みだったと感じます。

その歩みは、みなさまの日々の困り事に地道に向き合う道でした。出会った方の24時間を支えながら、生まれ育ったこの町で生涯暮らしていけるホームを50人分用意することをみなさまに約束し、その約束もあと5年で達成できるところまでたどり着きました。

障害福祉で起業する人の多くが児童デイの開業を考えますが、どれだけ素晴らしい療育や支援をしたとしても、この町で生涯暮らし続けるための支援がなかったら、幼い頃に出会い成長を見守ってきたみなさまが、いつかはどこか遠くへ行ってしまいます。誰も遠くに行って欲しくない、ひとりも悲しい思いをして欲しくない。障害福祉で起業する人なら、誰もがその想いでつながっているのではないのでしょうか。

最重度の障害のある人でも、生まれ育った町で不自由なく暮らせる社会。そしてさらにその未来には、どこであっても好きな町で、必要な支援を受けて不自由なく暮らせる、そんな時代も来るかもしれない。もうそんな夢を語ってもいい頃だと思っています。

地域で普通に生きるとは

「障害があっても地域で普通に生きることを目指す」のだと我々はよく語るが、では「地域で普通に生きる」とは何のことだろうか。

近所の人といつも笑顔で挨拶をかわし、町内の清掃を率先しておこない、祭りや運動会や行事に欠かさず参加することだろうか。しかし忙しい現代人は、隣に住んでいる人の顔も知らず、行事も参加したことがない人が多い。自分もまた、誰にでも笑顔で挨拶をする人間ではないし、行事にも清掃にも参加したことがなかった。それは地域で生きていることにはならないと言われるだろうか。

ねがいのいえが運営する2軒の保育園で、3月に卒園のお別れ会をおこなった。入園のとき赤ちゃんだった子が、お別れの時には園長を「ふっくん」と呼んでくれる。その園児たちは4月から次の幼稚園や保育園へとそれぞれ巣立って行く。最後の日の夕方、保護者が迎えに来てみんな「帰らない」と言って園庭を駆け回っていた。

障害の支援では出会った方に生涯寄り添うねがいのいえは、利用に卒業がなく別れの機会が少ない。



その日あとになってからじわじわと寂しさが押し寄せて、可愛かった子どもたちとお別れをかみしめていた。

翌日スーパーへ買い物に行くと、卒園した園児の親子が偶然いらして「あ、ふっくだ」と言ってくれた。互いに親しく声を掛け合う大人と子どもがいて、小学生になったときにばったり会ったら「大きくなったね」と目を細め、高校生になったときに驚いて二度見し、そんな関係を同じ町で数十年つなげていくことができる。地域で普通に生きるとはそういうことなのかもしれない。

スクールバスに乗せられて特別な学校に通う障害の子は同じ町の人たちとそんな関係をつむいでいけるのだろうか。共生社会への第一歩はやはり統合保育と統合教育からかもしれない。

保育園での「心のケア」

重度の障害の子も通う「ねがいのいえ保育園」では、保育所等訪問も使って手厚く支援しているが、障害ではなく普通に入園してきた子に大変な子がいるという訴えがあった。お茶を飲まない、散歩で歩かない、お昼寝をしない、等の困りごとがあり保育士が自信をなくしていると聞き、現場に入って様子を見た。まもなく2才になるけんちゃんは、見た目はごく普通のかわいらしい男の子だった。



すると確かに、お散歩では蟻や葉っぱが目につくと座り込んでそこから動かなくなるため他の子たちが歩くのを止めて待たなければならない、他の子がお昼寝する時間も全然眠くならず毎日ずっと起きて遊んでいる、そして何よりも、自分のしたいことと違うことを促されると火がついたように怒り、反り返って泣きじゃくる、等の行動が見られた。

正式に診断を受けたらおそらくアスペルガー症候群だろうと思われた。療育の専門家が見たら、次の行動を視覚的にわかりやすくする等のアプローチを指導されるのではないかと思った。しかしねがいのいえが目指すのは、予想と違うことが起きてもその苦しさを受け止め、怒らずに乗り越えることができる人になることである。それは体のやりとりを通した心のケアであり、保育士も含めた全スタッフに研修で伝えているが、現場で実践できるためにはOJTを必要とする。その絶好のチャンスだった。

3日間一切手を出さずに様子を見続け、こちらの存在を認めてくれた頃合いで機を見てやりとりを実践し、個別の特色を把握した。お散歩のときに動けなくなったらお尻を支えて体が前に向くようにやりとりし、前に進む気持ちになる時を待つ、かっとなって感情を爆発させる一瞬に暴れる手足を止めて気持ちが切り替わるのを待つ、みんなが集まる時間にその場所から走り去りそうになったらゆるゆると動ける余地を残しながら引き留める等、本人の特性に沿ったやりとりの方法を伝えた。自信をつけた保育士が勢いですすめたお茶も飲み干した。支援に入って1か月、ショートスリーパーと言われたのが嘘のように今は誰よりも遅くまで眠っている。

思いを言葉で的確に伝えることができないのは、幼児には誰にでもある。先日は、いつも他の子よりも何でも上手に早くできるあいちゃんが、すねて動かなくなることがあった。そばに座って「悲しいんだね」「そんな日あるね」と何もせずにとただ共感すると、抱っこを求めて甘えてきた。静かに抱きとめると、やがて自分からみんなの輪に戻っていった。翌日はインストラクターを招いて初めてのマットとトランポリンを

体験する日だった。その日も抱っこされたまま、他の子たちが熱狂する間もその輪に入ろうとしない。しかし体はやりたくてだんだん前のめりになっていく。「一緒にやってみる？」と聞くが、それでも参加できないまま、「今日はこれで終わります」というインストラクターの声がかかった。みんなでありがとうを言い片づけが始まろうとしたその瞬間、前に進んで行った彼女の姿をみんなが見てとり、そのままマットとトランポリンをやり遂げるのを待った。

同じ月齢の子より何でもできる素直でいい子だったあいちゃんに、どんな負担がのしかかったのかはわからない。しかし気持ちをわがままに表したい時があるのは当然のことであり、それがその日だった。最後にマットとトランポリンをやり遂げて誇らしげにその時間を終えた体験は、言葉で表せないもやもやを発散し乗り越えて前に進む道のりだった。週が明けた月曜日、食事もトイレも一番に終えた彼女は、「座って待ってね」という先生の言葉に穏やかに応じていた。



心を支えるケアが大切なのは、障害のある子もない子も同じである。障害福祉の現場職員はもちろん、保育園や学校や、人を支える世界中の全ての支援者に広がって欲しいと願っている。

虐待事案の報告

大変恥ずかしい話ですが、障害福祉サービスを18年おこなってきたねがいのいえで初めて、スタッフによる利用者への虐待が発生しました。利用者2人で外出中に、その方の頭をたたくという出来事でしたが、それを通りかかった一般の方が目撃し事業所に電話で通報がありました。

スタッフ本人へ事実確認をし、ご家族と行政へ報告と謝罪をしました。その後スタッフへの処遇について考えました。通常なら退職してもらうのが当たり前であろうと思われます。しかしそれは、障害者虐待をした人間がねがいのいえからはいなくなるが、社会からいなくなることはありません。ねがいのいえとしてより社会に貢献するとしたら、感情のコントロールができなかった一人の人間がカウンセリングを受けながら、同じ環境にいて二度と同じ過ちを起さなくなることではないだろうかと考え、本人と今後のことを話し合いました。結果は、本人が退職の意向を示し去って行きました。

日ごろから、心のケアは虐待を防止するための最良の策であり、ねがいのいえでは虐待は起こらないと公言してきましたが、このような過ちが起きたことに改めておわびを申し上げます。そして二度と起こらないよう、日々の関わりとスタッフ自身の心のケアを改めて考え直す所存です。

認定 NPO 法人について

みなさまに認定 NPO 法人を取得するための寄付へのご協力をお願いしておりますが、7月15日現在、申請している国庫補助および社会福祉法人取得の審査結果がまだ届いておりません。この結果しだいで今後の方向性が変わりますので、その結果とご協力のご願いは次回、10月ごろに発行する本紙にて報告いたします。いつも応援ありがとうございます。